HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	匿名フーリエ主義者のプリードン批判:「プルードン氏への反駁」(ファランジュ紙)を中心に
Author(s)	大塚, 昇三
Citation	經濟學研究, 44(4), 1-19
Issue Date	1995-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31980
Type	bulletin (article)
File Information	44(4)_P1-19.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 44-4
北海道大学 1995.3

匿名フーリエ主義者のプルードン批判

——「プルードン氏への反駁」(ファランジュ紙)を中心に——

大塚昇三

I. はじめに

H. ブールジャンは，フーリエとフーリエ主義者のP.-J. プルードンへの影響を分析して，総論的につぎのようにのべている。「総合的にみて，プルードンにたいするフーリエの影響は非常に大であった。おそらく，自己の精神の独立を求めてやまなかったこの理論家(プルードン)が影響をうけたもののなかでは最大であったであろう」と[1]。この評価にかんして，プルードンにとってフーリエの影響が最大であったかどうかはべつにして，それがきわめて大きなものであったことにまちがいない。

ところで，プルードンは1840年代にフーリエ派の分配論を執拗に批判している。フーリエの分配論は基本的に三つの主張からなっていた。第一に，資本を債券化し，これによってファランジュとよばれる共同体の各成員の財産を緊密に段階付けること(「財産の段階的不平等」)。第二に，各成員はそれぞれが生産において拠出する資本，労働，才能に比例して所得をうけとること(「比例的分配」)。第三に，それらの財産や所得は，共同体内外での自由な労働と性愛を介して拡大した人間関係にもとづいて贈与ないし遺贈され，各成員の自由意志によって富の再分配がおこなわれること(「分散相続」)。この三つである[2]。なお，フーリエの分配論とその弟子たちのそれとはかならずしも同じではないことも指摘しておこう。弟子たちは師の分配論を引き継ぎはした。しかし，かれらは，このうち財産の債券化と資本・労働・才能への比例的分配の主張を文字どおり踏襲し，これを精緻化したものの，財産の段階的不平等そしてとくに分散相続の主張にかんしては，意図的に，積極的な言及を控えた嫌がある[3]。他方，プルードンの基本的主張は賃金の平等と財産の平等である。かれはこの立場からフーリエ派の分配命題を批判していたのであった[4]。

とはいえ，プルードンの，フーリエにたいする態度とフーリエ主義者にたいするそれとのあいだには興味深い相違がみられる。たとえば，「明らかにこの偉大な人物(フーリエ)は読者に真面目にとられていない。かれは自分の心の底を語ろうとしなかった」[5]，あるいは「私はか

1) Bourgin, H., *Fourier: Contribution à l'étude du socialisme français,* Paris 1905, p.574.

2) フーリエの分配論の第一の主張については，拙稿「シャルル・フーリエと階級調和の方策」『経済学研究』(北大)第37巻第2号(1987年9月)の第3節を参照。第二の主張については，同「シャルル・フーリエと共同性」『経済学研究』(北大)第35巻第3号(1986年1月)の第1節参照。第三の主張については，同「シャルル・フーリエの「愛の新世界」と資産配分」『経済学研究』(北大)第39巻第4号(1990年3月)参照のこと。

3) たとえば拙稿「ヴィクトル・コンシデランの分配論」『経済学研究(北大)』第41巻第4号(1992年3月)参照。

4) たとえばつぎの箇所を参照。Proudhon, P.-J, *Qu'est-ce que la propriété ?,* 1840(*Œuvres complètes,* t. IV, Slatkine, 1982), pp.219-239, pp.275-279, pp.282-284, p.292. p.345. 長谷川進訳『プルードン』III(アナキズム叢書)，三一書房，1971年，145頁～169頁，213頁～217頁，221頁～223頁，232頁，298頁。この著作については以下，*Propriété* と略記する。なお，プルードンのテクストはすべてリヴィエール版を復刻したスラトキン版の全集を使用した。

5) Proudhon, *Propriété,* p.219. 訳146頁。なお訳はか

ねてからフーリエにでなく，フーリエの弟子たちにたいして疑念をいだいていた。フーリエのほうは，かつてないほど率直な確信をいだいたユトピストであった」[6]とプルードンはのべていた。もちろんこれだけでプルードンがフーリエについては肯定的に，その弟子たちについては否定的にとらえていたとはいえない。しかしプルードンがそのようにとらえていた可能性は考えられるだろう。ともあれ，フーリエの主張とフーリエ主義者のそれとはかならずしも同一でないこと，およびこの両者にたいするプルードンの態度に相違がみられることは事実である。

ところで，このような議論の錯綜した状況は，フーリエ思想の独自性を測定するという観点からみれば，きわめて有益な手掛かりになる。その議論のなかでフーリエとフーリエ主義者とプルードンのあいだの類似点や対立点が解明されれば，おのずとフーリエの独自性も明らかになろう。そこで本稿は，フーリエ思想の独自性の解明をめざしつつ，フーリエ派とプルードンとの一連の論争のひとつをこころみに検討する。

ここで両者の論争を時間にそって概観しておこう。

プルードンは1840年に『所有とは何か』(以下『所有』と略記)を上梓し，そこでフーリエおよびフーリエ主義者の見解を批判していた[7]。同年10月4日付のイムパルシアル・ド・ブザンソン紙に，おそらくフーリエ主義者のイポリット・ルノーと思われる人物が，H．R．の署名で，所有を擁護する立場から『所有』にかんする長い論評を掲載した[8]。かれは，10月14日付のファランジュ紙にも『所有』にかんする短い書評を掲載している[9]。他方プルードンは1841年に『ブランキ氏への手紙』を公刊し，そこでコンシデランを名指しで批判する[10]。こうしたプルードンのフーリエ主義批判をうけて，匿名のフーリエ主義者が『フーリエ主義の擁護』(以下，『擁護』と略記)を1841年に上梓し[11]，プルードン批判を展開する。プルードンはこの匿名フーリエ主義者をフーリエ派の領袖コンシデランとみて，『擁護』にたいする反論を『所有者への忠告』(1842年)(以下，『忠告』と略記)として出版する[12]。匿名フーリエ主義者は，この『忠告』を『擁護』にたいする回答とみなし，これに再度反論する。かれは1842年の5月末から6月にかけてファランジュ紙に三回にわたって「プルードン氏への反駁」を掲載し[13]，プルードンは1843年に『人類における秩序の創造』を公刊して，そこでフーリエ主義を批判する[14]一方，フーリエの「系列」概念をふまえたプルードン自身の科

ならずしもこれによっていない。

6) Proudhon, P.-J., *Avertissement aux propriétaires,* 1842 (*Œuvres complètes,* t. X, Slatkine, 1982) p.203. これについて以下，*Avertissement* と略記する。

7) Proudhon, *Propriété.* 注4)参照

8) H. R. (Renaud, Hippolyte), L'article de *"Qu'est-ce que la Propriété?," L'Impartial de Besançon,* 4 octobre 1840. なおこれについては，とりあえずプルードンの『所有にかんするブランキ氏への手紙』(1841年)におけるオジェによる注を参照した。Proudhon, P.-J., *Lettre à M.Blanqui sur la propriété,* 1841 (*Œuvres complètes,* t. X, Slatkine, 1982), notes d'Augé-Laribé, pp.117-118. これについて以下，*Lettre* と略記する。

9) Renaud, H., *"Qu'est-ce que la propriété?* Par P.-J. PROUDHON," *La Phalange,* 14 octobre 1840, N° 19, (*La Phalange,* 3ᵉsérie, t. I, pp.339-343, Paris, 1840. なお，巻数と頁数は編集版のそれをさす。)

10) Proudhon, *Lettre,* pp.111-122.

11) L'anonyme, *Défense du fouriérisme,* Paris 1841. 残念ながら，本稿の執筆にあたってこれを参照できなかった。このテクストについては稿をあらためて検討したい。なお，オジェは，プルードンの『忠告』への序文のなかで，この『擁護』の著者がダメト(1812-1884年)(Claude-Marie-Henri-Dameth)であったと指摘している。Proudhon, *Avertissement* (*L'Introductuion* de Michel Augé-Laribé), pp.158-159.

12) Proudhon, *Avertissement.*

13) L'Anonyme, "Réponse à M.Proudhon," *La Phalange,* N° 62, 25 mai 1842 ; N° 63, 27 mai 1842 ; N° 66, 3 juin 1842, (*La Phalange,* 3ᵉsérie, t. V, pp. 1012-1016, pp.1029-1032, pp.1084-1088, Paris 1842.) なお，巻数と頁数は編集版のそれをさす。以下，この史料については，"Réponse," と略記する。

14) Proudhon, P.-J., *De la création de l'ordre dans l'humanité,* 1843 (*Œuvres complètes,* Slatkine, 1982), surtout, pp.225-233.

学方法論にあたる「系列の理論」を展開する[15]。これにたいして，コンシデランは1848年に『旧世界を前にした社会主義』を公刊し，そこではじめてプルードンを批判する[16]。こうして1848年から1849年にかけて，プルードンとフーリエ主義者との論争が，デモクラシー・パシフィック紙，ペープル紙，ルプレザンタン・ド・ペープル紙に掲載されることになる[17]。

本稿では，上記の論争のうち，さしあたって，匿名フーリエ主義者によって1842年5月から6月にかけてファランジュ紙上に掲載された「プルードン氏への反駁」[18](以下,「反駁」と略記)を検討する。これをみると，そこでの論述は匿名氏の前著『擁護』をふまえたものであって，その説明はかならずしも十分に尽くされていない恨みがある。とはいえ，プルードンの『忠告』にある『擁護』からの引用部分をみるかぎり[19]，この『擁護』の主張とファランジュ紙上でのそれとのあいだに，ほとんど変化がみられない。そのかぎりで匿名氏が再度プルードン批判をこころみる箇所こそ，匿名氏が固執する論点であったと思われる。その論点とは，人間の諸能力の不平等と所有の擁護である。これを軸にして匿名氏は，平等の立場からのプルードンの批判にたいしてフーリエ派の分配命題を擁護していた。けれどもその論述には経済学的分析が少なく，したがってそれは，経済学に精通したプルードンにたいする反論としてはきわめて不十分なものといわざるをえない[20]。ところが，のちにみるように，この反論をとおして，はからずも，プルードンの理想社会像と貧困観およびそれをささえる欲望認識と，フーリエのそれらとのあいだの親近性が浮き彫りにされている。

さて，匿名氏の「反駁」は，1842年の5月25日，同月27日，および6月3日付のファランジュ紙に3回にわたって掲載され，ファランジュ紙編集者すなわちコンシデラン宛の書簡形式で書かれている。全体は二部構成で，第一回目の掲載分が第1部，第二回目と第三回目の掲載分が第2部とされた。第1部では，プルードンの『所有』におけるフーリエ派の分配論批判がまず手短に論じられ，これを分析してプルードンと匿名氏自身との対立点が指摘される。第2部では，この対立点を中心にプルードン批判が展開される。以下，本稿では匿名氏の叙述にそって，第1節では匿名氏によるプルードン解釈を，第2節では匿名氏によるプルードン批判をみる。そして最後に，匿名氏の「反駁」の特徴と，それから浮き彫りになるフーリエとプルードンの関係を検討してみたい。

II．匿名フーリエ主義者のプルードン理解

匿名フーリエ主義者は，プルードンのフーリエ主義批判を再度反駁するにあたって，まず，『所有』の第3章，第6節「社会においてすべての賃金は平等であること」でのべられているプルードンの主張に論点を集中する[21]。プルードンはその箇所で分配の平等を主張する立場からフーリエ主義の「各人にはその資本，労働，才能におうじて」という分配命題を批判すると

15) *Ibid.*, chapitre III, p.127sq. プルードンによれば，「系列の法則を開示したのはフーリエであった」(*ibid.*, p.166.)とのべている。

16) Considerant, V., *Le socialisme devant le vieux monde*, 2eédition, Paris 1848, pp.99-111).

17) なおこれらについては，とりあえずブールジャンの研究を参照した。Bourgin, H., *op.cit.*, p.547, nb.

18) 注13)参照

19) 匿名氏の『擁護』からの引用は『忠告』の全般にわたってみられる。なお，オジェは，『忠告』の序論において，プルードンのそこでの議論を理解するうえで必要な匿名氏の主張を数頁にわたって紹介している。Proudhon, *Avertissement* (*L'Introductuion* de Augé-Laribé, M.), pp.159-164.

20) なお，佐藤茂行は，フーリエにもコンシデランにも厳密な意味での経済学はなかったこと，および当時のプルードンがフランス社会主義者のなかでは唯一の，経済学に通暁した存在であったことを指摘している。佐藤茂行『プルードン研究』木鐸社，1975年，43，53頁参照。

21) L'anonyme, "Réponse á M. Proudhon," *La Phalange* (3e série, t. V), pp.1012-1013, N° 62, 25 mai 1842.

同時に，プルードン自身のありうべき社会における富の分配のありようを端的にのべていた[22]。匿名氏は，そこでのプルードンの主張を，意図してか，その等労働交換の価値論的説明を避けるかちで，とりあえずつぎのよう要約している。

プルードン氏はいう，「自然は，すべての人間を協同者(associés)としてつくった。ところで協同者は平等である。したがって一方が他方よりも多く支払われるということがあれば矛盾を含むことになる。プルードン氏はつけくわえる，人間はそれぞれある仕事をする能力と権利をもっている。他方，諸能力の多様性と特化によって，また事物の自然によって，分業が要請され，この分業はすべての人にたいしてさまざまな仕事を可能で容易なものにさえする。だから万人は社会によって要求される労働の平等な［仕事の］部分をおこなう平等な権利と，したがって賃金にたいする平等な権利をもつ」[23]。

このように，この要約ではプルードンの基本的主張すなわち賃金の平等と，その論拠として人間は協同者として平等であること，人間の諸能力は多様であること，この多様性にもとづいて社会的分業が成立すること，さらにこの分業が社会的仕事を容易にし，万人になんらかの仕事が賦与されることがのべられている。

他方，プルードンが「一方が他方よりも多く支払われるということがあれば矛盾を含むことになる」というとき，その論拠として第一に「ある労働者の生産物は他の労働者の生産物でもって支払われるにすぎないからである」とのべていた[24]。そしてこの主張をささえるのが，等労働交換の価値論的説明すなわち生産物の「絶対的価値」にかんする命題であった。この「絶対的価値」とは「生産物に要する時間と出費の合計」と規定され，生産物はこの価値以上でも以下でも交換されない[25]。なお賃金の平等の主張をささえるこうした価値論について，匿名氏はさきの要約では明示していないことを指摘しておこう。

さて，匿名氏は，まず，プルードンのいう協同者としての人間の平等については同意を表明する。「人間は自然権にかんして平等であること，すなわち人間は生存し，自己のあらゆる能力を教育と労働によって発展させる平等な権利を創造者から受け取った」という。そうして，この立場から人間の協同者としての平等は認めるのである[26]。この見解は，おそらくコンシデランが「所有権の理論」でのべた考え方をふまえたものだろう。コンシデランによれば，土地の用益権を時効にかからない自然権とし，労働にたいする権利をこれと同等なものとみなして，これらの権利は万人に保証されねばならないとしていた[27]。匿名氏は，この自然権はファランステールの組織の土台でもあるとのべている[28]。

けれども，プルードンの主張にかんして，匿名氏が同意するのはこの点のみである。匿名氏は，万人が土地を占有し，そこで労働する平等な権利をもつのは認める。しかし労働の報酬が平等であるという点は認めない。匿名氏によれば，プルードンの主張は「根本的に誤った二つの事実」を想定しているからだという。その二つの事実とは，つぎのものである。

第一に，労働者は力量(forces)にかんして平等であること，

第二に，仕事(les tâches)は相互に平等でありうること，

この二つである[29]。

22) Proudhon, *Propriété,* pp.219-224., 同訳 145頁～152頁。
23) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), pp.1012-1013.
24) Proudhon, *Propriété.*, p.221, 同訳148頁。
25) *Ibid.*, p.232, 同訳161頁。また，佐藤茂行，前掲書，64～66頁を参照。
26) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1013.
27) Considerant, V., "De la propriété," *La Phalange,* N° 35, 1 juin 1839 (*La Phalange,* 2e série, t. II, 1838-1839, pp.585-593.)
28) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p. 1013.
29) *Ibid.*

匿名氏は，まずこの第二の想定について，プルードンの労働価値説に着目し，これをつぎのように批判する。さまざまな仕事を比較する場合，仕事の平等をいうためには，職能相互の比較をしなければならない。この比較をするためには尺度が必要になる。その尺度として職能に要する時間があげられるが，この尺度はそれぞれの職能に要する労働の強度や難易度を測定しえない。したがって時間は職能を比較する尺度になりえず，仕事の比較はできないということである[30]。

匿名氏は，さらにこうつけくわえる。問題をおきかえて，生産物の価値はその生産に要する労働によって決定されるといっても，現実には「生産物の価値を決定するのは意見の気まぐれである」[31]。したがってこの価値の生産にどれだけの労働や技能が投入されようとも，それらの量は，実際の取引で評価される生産物の価値を説明するものではない。したがって，かりに生産物の価値が労働価値説的にみて等しくとも，これらの生産物が交換される場合，その価値にかんして等価で交換されるとはかぎらない，というのである。ともあれ以上の説明から，匿名氏は「仕事の平等は，実際上，不可能である」とするのである[32]。

一方，かりに「さまざまな仕事は相互に平等でありうる」としても不都合は生じると，匿名氏はいう。そのさいかれは「労働者は力量にかんして不平等である」というかれ自身の事実判断をすべりこませて，こうのべている。さまざまな仕事の絶対的平等は「弱者には重すぎ強者には軽すぎるような画一的な荷重を万人に課する」ことになる。これは不公正である。「職能者としての義務を遂行してしまったあと，なお生産できるし生産したいとおもっている強靱な労働者に不活動状態を強制できるかどうか」。もし強制できないのであれば，仕事の平等は成立しえないはずである，と[33]。

じつは，これに類似した問いを，匿名氏はすでにそのプルードン批判の書『擁護』でのべていた。プルードンは『忠告』の前半，第6節「アダム・スミスの定式による諸条件の平等の証明」のなかで，まず，さきにみた「絶対的価値」をアダム・スミスの定式として「それぞれの生産物は，それに費やされた時間と出費に値する」と規定しなおす。そしてこの定式に反対する効用価値説を批判し，価値の変動は組織の欠如から生じるのであって，交換に内在する事実から生じるのではないと論じていた。つづいてプルードンは匿名氏の『擁護』から引用し，これによれば，労働者が気晴らしでおこなう労働はきわめて生産的であって，その成果は弱者にとって富や享楽の新しい源泉になるだろう。賃金の平等はこうした可能性を抑圧するものであり，たえがたい専制でしかない。このように匿名氏はプルードンの賃金の平等を批判しているというのである[34]。

プルードンはこの批判にたいして，経済学において探求すべきは「社会的生産と交換の法則」であるとして，スミスの定式から生じる帰結をいくつか指摘している。私的労働は，それが需要されなければ，個人にとっては価値があっても協同者にとっては価値がないこと。したがってこの私的労働は賃金すなわち社会によって購買された労働の評価にかんして勘定には入らないということ。さらに，分業の原理によって各労働者はひとつの社会の公僕になって，その生産物はこの社会の必要に釣り合っていなければならない。したがってすべての労働者にとって保証も報酬も義務も債務も同一であること[35]。

匿名氏はこれにつづく箇所に注目し，『擁護』と同じ反論をくりかえす。かれの『忠告』から

30) *Ibid.*
31) これについては，プルードンによる匿名氏の『擁護』からの引用を参照した。Proudhon, *Avertissement*, p.188.
32) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1013.
33) *Ibid.*
34) Proudhon, *Avertissement*, pp.193-194.
35) *Ibid.*, p.194.

の一連の引用とその反駁をみてみよう。

「プルードン氏はいう，たとえ，労働者が自分の社会的仕事を達成し，自分の公僕としての義務を果したのち，なんらかの自由な活動に身をゆだねても，その結果生じる私的な生産物はこの労働者の賃金の増大をもたらしえない。それは現在，絵画に夢中になる司法官が国家から俸給の増額分をえることもないのと同様である」と[36]。

これにたいして匿名氏はこう反論する。「その司法官が自分の絵筆の産物を好きなように処分する自由がないかどうか，したがってその賃金ではなく(同じことだが)その財産を自分で増大させる自由がないかどうかを尋ねたい。あるいは私の反論を一般化させると，メモワール(『所有』をさす：引用者)の著者が考えるような規範的な社会では私的な取引すべてが禁止されないかどうか。コミュニストでもないかぎり，このような愚論を支持する者はだれもいないと私は思う」[37]。

匿名氏はさらにプルードンに語らしめる。

「この私的な生産物は，個人にとって賃金の増大も減少ももたらさないのであって，社会的不平等の口実にはなりえない。なぜなら，この生産物を実現するには協同者が時間と必需品の消費を行わなければならなかったからである。そしてこの観点からすれば，その快楽においてであれその出費においてであれ，なんらかのものが差し引かれることになるからである」[38]。

これにたいして匿名氏は，価値論に言及することなく，ただ「司法官はその職能がかれに認める余暇の時間を絵画にあてることをのぞむ。かれは余暇の時間の支配者ではないのか」とだけのべている[39]。かれはさらに引用する。

「私的な生産物は，さらに，(社会的：筆者)不平等の口実にはならない，と著者は付け加える，なぜなら生産物は私的にもその等価物としか交換されえないからである。このことはその契約者の立場をなんら変えるものではない」[40]。

ところが匿名氏はここで一転して「契約者のあいだではこれは可能である」として，プルードンの主張を認めるのである。ただし，匿名氏はこう付け加える。「しかし強者である契約者と，契約を取り結べない人びとすなわち弱者とをくらべれば，事態はまったく逆にならないか。…著者(プルードン氏)の考えは実際，強者も弱者も存在せず，万人が等しい時間に等しい価値を永久に生産するというような仮定のなかでしかあてはまらないであろう。これはあきらかにおかしいし，まったく馬鹿げている」と[41]。

匿名氏は，プルードンがこの文脈でのべる最後の主張も引用している。

「最後に，私的生産物や私的節約によって労働用具を独占するのは社会においては不可能であるし，あるいはそうした独占がなされないようにすべきだから」[42]。

これについて，匿名氏はこうのべる。プルードンはその平等主義的な憲章において「個人的自由」を宣言してはいるが，「司法官が絵を描き，学者が自分の庭を耕すのを妨げるには，つまり人類の労働力と知能を鎖でつなぐには，恐ろしい抑圧が必要だろう」と[43]。以上が匿名氏

36) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1014. なお匿名氏による『忠告』からの引用は頁数がほとんどしめされていないものの，全集版の『忠告』で当該箇所が確認される。Proudhon, *Avertissement,* p.194. 以下，匿名氏による『忠告』からの引用は随時全集版で確認するが，そのかぎりかれの引用はみなきわめて正確であった。

37) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1014.

38) *Ibid.* なお匿名氏が引用するのは，プルードンの『忠告』のつぎの箇所である。Proudhon, *Avertissement,* p.194.

39) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1014.

40) *Ibid.* なお匿名氏が引用するのは，プルードンの『忠告』のつぎの箇所である。Proudhon, *Avertissement,* p.194.

41) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1014.

42) *Ibid.* なお匿名氏が引用するのは，プルードンの『忠告』のつぎの箇所である。Proudhon, *Avertissement,* pp.194-195.

43) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1014.

による一連の引用とそれにたいする論駁である。

この議論ははじめから平行線をたどっているといえよう。匿名氏の参照するのは，プルードンのすぐれて経済学的な，すなわち賃金の平等にかんする価値論的説明である。にもかかわらず匿名氏はこれに正面から取り組むことなく，価値論を避けるかたちでプルードンの主張が自由の抑圧でしかないと繰り返すだけなのである。

とはいえ，匿名氏にとって私的な労働が問題となるのは，あくまで労働者の能力差を前提した場合にかぎられる。労働者の力量が同じであれば，匿名氏はプルードンの主張も認めるのである。こうして匿名氏は，最初に指摘した「労働者は力量にかんして平等であること」というプルードンの第一の想定に問題をしぼりこむ。

ところで，プルードンが「労働者は力量にかんして平等であること」を想定しているという匿名氏の指摘はかならずしも誤っているわけではない。けれどもプルードンは労働者の力量については自然的には不平等だが社会的には平等だという言い方をしている[44]。すでにみたように，プルードンはありうべき社会において人びとは平等な仕事にたいする平等な権利と賃金にたいする平等な権利をもち，賃金は平等でなければならないとしていた。そのかぎりで労働者の力量は平等なのである。他方，私的な労働の基礎には労働者の力量にかんする自然的不平等が認められているが，ただプルードンによればその成果は，交換をとおして社会的に賃金の不平等というかたちでは実現されない。したがって匿名氏が労働者の能力差を主張するとき，かれにとって問題にしうるのはプルードンが「諸能力の自然的不平等」をどうとらえているかということになる。

そこで匿名氏の注目するのが，『所有』の第3章，第7節「諸能力の不平等は財産の平等の必要条件であること」であった。プルードンはここでサン=シモン主義の「各能力にはその仕事におうじて」およびフーリエ主義の「各人にはその才能におうじて」という分配命題を批判していた[45]。ただしプルードンは，フーリエ主義におけるように労働と才能とを別個の生産要素としてかならずしも区別しているわけではなく，フーリエ主義のいう才能を労働の範疇でとらえているようである[46]。

匿名氏は，まず，この第7節におけるプルードンの主張をつぎのように要約している。いささかながくなるが，これをみてみよう。

「自然は社会的必要と個人的能力とを釣り合わせる比率で創造した。その結果，きわめて稀少であるがゆえにきわめて貴重とみなされる能力をもつ人びとと，能力のなす職能が社会にとってあまり必要でないがゆえに実際にあまり稀少ではないような人びととのあいだで，平等の法則に反するということは生じなかった。さらに才能ある人間は，その特技の排他的特質によって他の誰よりも社会に債務を負うているがゆえに，社会がこの人間にのみ使う手だてを与えた武器をこの人が社会に反するかたちで使うのは不公正であった。またこの才能がこの人固有の資質に帰せられるなら，これは，もっとも粗野な諸能力と同様に，社会にとってほとんど有用でなくなるであろう。分業は，あらゆる仕事をますます容易にすることによって，たえず自然的不平等を否定していく傾向があった。他方，才能の発展は社会的な成果であって個人的な成果ではなく，その職能が難しいものであればあるほど社会にとっていっそう費用がかかるがゆえに，この才能の発展から利益を取得すべきはその才能の持主個人ではなく社会であった。結局，才能をもつ人間は道具の受託者にすぎなかった。この道具は，社会によってのみ，社会のためにのみ価値をもつがゆえに，その受託者は，かれの個人的諸権利にかんして，他のあらゆる

44) Proudhon, *Prooriété,* p.221, 同訳148頁。

45) *Ibid.,* pp.224-239. 同訳152～169頁。

46) ちなみに，プルードンは『忠告』でアダム・スミスにならい，才能を労働のカテゴリーのなかでとらえる旨を言明している。Proudhon, *Avertissement,* p.196.

職能者と同じ立場にあることが判明した」[47]。

この要約はプルードンの主張をかなり的確にとらえたものといえよう。自然は社会的に必要な能力を必要なだけ創造したということ，この意味で社会にとって諸能力は平等にとって不可欠であること，才能すなわちすぐれた能力は社会的産物であってその持主は社会に債務を負うこと，その才能が高度なものであればそれだけその持主の社会に負う債務は大きくなること，才能のもたらす利益は社会のものであること，つまり才能の持主はその才能の受託者にすぎないこと，最後にあらゆる才能ないし能力は個人的権利にかんしては平等であること，これらはいずれもプルードンの主張したとおりである。

匿名氏は，ここから，いささか強引にも，プルードンが論じているのは「職能相互の平等」だと理解する。そうして，これは「フーリエ派の「各人にはその才能におうじて」という公式が提起する問題からはずれている」と判断する。というのは，フーリエが「才能の不平等」をいうとき，かれは「同じ職能を果す諸労働者の不平等について」論じているからある。だから「職能相互の平等」をいくら論じても，その議論は，同じ職能に従事する各労働者の活動のもたらす生産物を評価するさい，その「個人的な事実」を斟酌できないであろうと指摘する[48]。

匿名氏は「同じ職能を果す諸労働者の才能の不平等について」つぎのように説明する。すなわち，たとえば社会が無名の音楽家とモーツァルトを養成する場合，社会にとって両者の養成にかかる費用は等しい。しかし人びとが美の感情と比較能力をもつかぎり，その両者の功績の価値は等しくならないだろう。そして天才が自己の才能から私的な利益を手に入れるのをだれも妨げられないだろう。優越者の属性は，自己の価値を他者に認めさせることにあると[49]。

匿名氏によれば，本質的な問題は，同一職能にかんする労働者の能力の不平等をどう評価するかである[50]。では，この問題にかんしてプルードンはどう考えているのか。匿名氏は『忠告』の前半，第7節「生産において才能が果す役割について」の最後の箇所を引用する。

「プルードン氏はいう，たとえ財産におけると同様に諸能力において不平等がなお存在するとしても，・・・それは社会経済の偶然的混乱であって自然の法則ではない。氏はさらに後のほうでつけくわえる，それは，私が第一のメモワール(『所有』をさす：筆者)でのべたことと矛盾しているようにみえる。しかしこのことは細かく調べると驚くほど一貫している。所有の体制では人間の人間にたいする諸関係は優越者の劣等者にたいする諸関係であって，特技の特技にたいする諸関係ではない。したがって当然，知能の知能にたいする諸関係は，より多く持つ者のより少なくしか持たない者にたいする諸関係をも意味し，種にたいする属の諸関係を意味しないことになった。同様に，諸職能は階層化はされる(hiérarchisées)が，同列に組織され(coordonnées)はしなかった。私はこれまで諸能力の自然的不平等を支持したことはない。私はこの点にかんして態度を留保さえした。しかし，かりに私の時代の諸知能を平等主義的社会に持ち込むとすれば，諸能力の特化がない場合，諸能力の不平等は財産の平等の必要不可欠な条件になるであろう，と私は言わなければならないし，私はそういった」[51]。

匿名氏は，やはりこの主張が「才能の諸権利にたいする著者のすべての議論が実際には諸職能にむけられていたことを示している」とし，さらにプルードンがそのレベルで「すべての知能は平等であると宣言している」とみなす。匿

47) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1015.
48) *Ibid.*
49) *Ibid.* なお匿名氏はこの説明を『擁護』から転載しているようである。
50) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1015.
51) *Ibid.*, pp.1015-1016. なお匿名氏が引用するのは，プルードンの『忠告』のつぎの箇所である。Proudhon, *Avertissement*, pp.198-199.

名氏によれば，プルードンは同一職能に従事する労働者の能力差について論じてはいなかった。プルードンは諸職能が要請する，特化された個個の諸能力相互の平等を主張していたのである[52]。

だが，匿名氏のこうしたプルードン理解はかならずしも公正ではないように思われる。プルードンはこの説明のなかに同一職能に従事する労働者の能力の平等も含意していた。匿名氏が参照する『忠告』の前半第7節の初めのほうに，プルードンのつぎのような記述がみられる。すなわち，才能の多様性が分業を生み，スミスの定式が交換における平等を導き，その結果，職業の対等性と報酬の平等が成立する。かれはこのことをこう説明する。「才能の自然的不平等は，しばしば職能となり，労働の特化によって相殺される。さらにこの不平等は，生産物の量にかんして，その職能の条件それ自体によって相殺される。つまりすべての社会的職能は，フーリエのいうように，良き組織においては軽度で容易に，しかも魅力的にさえなり，各労働者はそれぞれ職能を果せるようになる。そしてこの観点からみれば，諸能力は平等なのである。なお自然的不平等がのこっているが，これは生産物の質において現れるのであって，この不平等はほとんど無に帰する」[53]。

この説明によれば，プルードンの構想するありうべき社会では，社会的分業の進展にともない，だれもが自己の能力でなんらかの社会的職能を十分果せるようになる。そうなると複数の人間が同一職能に従事しても，かれらはみなその職能を十分に果せるはずである。つまりプルードンは同一職能に従事する労働者の能力についても当然考察しているのであって，かれらの諸能力も平等なのである。ちなみに，こうした諸能力の平等をふまえると，各人が生産に要した時間と出費の合計で測られるそれぞれの生産物の価値は当然等しくなるだろう。さらに，この平等な水準をこえる能力の持主は，よりすぐれた質の生産物を生産できることになる。こうして諸能力の量的な差異は質的な差異に解消されていく。したがって，プルードンが同一職能に従事する労働者の能力差について考慮していないとする匿名氏の主張には，いささか無理があるように思われる。

ともあれ，匿名氏は，プルードンは同一職能に従事する労働者相互の能力についてではなく，各職能に対応して特化された個個の諸能力相互の平等を論じているにすぎないとする。このようなプルードン理解にもとづいて，匿名氏は，プルードンによるつぎのようなフーリエ解釈をもっともなものと認める。すなわち，「フーリエは，不平等と差異(différence)を混同して諸能力の偶然的不平等を心理学的法則ととりちがえたので，間違ったのだ。セーが所有を文明の不変の形式と取り違えて間違ったのと同じように」[54]。

匿名氏はこの箇所こそ「著者(プルードン)の思想にもっとも完璧な明確さをあたえる」と評価した。プルードンによれば，所有が人類の運命からみれば本来不可能であるのと同様に，諸知能の不平等も悪しき組織から生じた偶然的混乱なのである。こうした主張の背後には，知能が平準化され均衡する世界，極度の分業によって諸知能の関係が特技の特技にたいする関係でしかなくなるような世界が想定されている。そのかぎりで諸能力は平等なのである[55]。匿名氏は以上のようにプルードンの主張を了解したのであった。

52) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1016.

53) Proudhon, *Avertissement,* p.196.

54) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1016. なお匿名氏が引用するのは，プルードンの『忠告』のつぎの箇所である。Proudhon, *Avertissement,* p.198. この引用箇所にかんして，プルードンの原文では inégalité contingente des capacités とあるところが，匿名氏の論説では inégalité convergente des capacités となっていた。これについての訂正記事が，ファランジュ紙の第66号の最後に掲載されている(*La Phalange* (3esérie, t. V, p.1084), N° 66, 3 juin 1842.)。

55) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1016.

III. 匿名フーリエ主義者によるプルードンへの反駁

さて，匿名氏は，前節でみたように，フーリエの問題設定とプルードンのそれとは異なることを指摘した。つまりフーリエは同じ職能を果す労働者の能力の不平等をいうのにたいして，プルードンは異なる職能を果す諸能力相互の平等を論じているということであった。匿名氏は，後者に反駁すべく，まずこの議論のレベルの違いに焦点をあて，プルードンの問題設定の非現実性を浮き彫りにする戦術をとる。

匿名氏の主張をきこう。プルードンのいう諸能力の平等からすれば，かれの理想社会では「すべての労働者がそれぞれの職能の功績にかんして平等であろう」。つまり「あらゆる音楽家，作曲家，演奏家，歌手は平等であろう。あらゆる医者は平等であろう。あらゆる学者は平等であろう。あらゆる詩人は平等であろう。あらゆる技術者は平等であろう。あらゆる労働者は活動と器用さにかんして平等であろう。おまけにあらゆる天才は平等に容易で平等に多産であろう。・・・この場合，プルードン氏は，才能ある人は同じような事柄について考えたり書いたりできるとみなしていた」のである[56]。

つぎに匿名氏は，プルードンの「諸能力の平等」という主張はフーリエの理論のなかで展開されている思想の「馬鹿げた誇張にすぎない」と指摘する。そうして匿名氏は，このフーリエの思想を「諸能力の等価性にかんする理論」と題してかなり冗長に説明している[57]。そこを要約しておこう。

これまでの社会では，数多くの素晴らしい能力が，事実，台無にされている。貧困階級には教育の恩恵がおよばず，かれらの能力は開花させられない。中間階級ないし貴族階級は教育の恩恵を受けてはいるものの，現行の教育制度は，あらゆる知能を無理やり同じ鋳型に投げ込むだけであって，諸知能の諸適性を開花させていない。天賦の才を開花させる教育制度がないことにくわえて，これらの才能の開花を阻止する偏見も根強い。その結果，諸知能の適材適所が達せられず，社会の宝物を社会の利益に反する方向に向けてしまっているのである。とはいえ，豊かな天賦の才があらゆるところから現れるのをしめすのに，とてつもない抽象力は必要ではない。いかなる社会組織においてもなんらかの特化した能力がみられる。そして名声を誇る多くの人びとは一定の観点で偉大であるだけであって，別の観点ではこれらの人びとは平均水準にいるということもはっきりと理解される[58]。

匿名氏は「諸能力の等価性(l'équivalence)にかんする理論」をこのように説明したうえで，その趣旨をこう指摘している。すなわち「絶対的に無用な，いかなる場合においても無用な人間など存在しない。そして絶対的に優越した，いかなる意味においても優越した人間などおそらく存在しないのである(傍点筆者)」と。ちなみにこうした人間観は前節の最後でみたプルードンのそれときわめて類似しているといえよう。だが，と匿名氏はいう。「われわれの取り組んでいる問題にかんして，事柄の真の局面はそこではない」のであると[59]。

では，匿名氏の取り組む問題とはなにか。すでに繰り返しのべられているように，「複数の労働者が同じ仕事をするところではどこでも，功績の相対的不平等が現れないかどうか，したがって各労働者の活動の生産物のあいだに交換価値の不平等が現れないかどうか」ということである。そしてこの場合，「労働者についてその仕事の成果の優越性をどのように評価するか」が問題なのである[60]。

匿名氏はこうした問題設定の正しさをいうた

56) L'anonyme, "Réponse à M. Proudhon," *La Phalange*, N° 63, 27 mai 1842 (*La Phalange*, 3e série, t. V, p.1029).
57) *Ibid.*
58) *Ibid.*
59) *Ibid.*, p.1030.
60) *Ibid.*

めに，才能を職能別に類型化して，その具体例をしめしている。画家のなかのラファエロ，作曲家のなかのモーツァルト，戯曲作家のなかのシェークスピア，武将のなかのナポレオンなど。こうした類型を考えれば，どの類型においてもただちに等級が生じるだろう。したがってプルードンのように極端な分業が自然的優越性を解消する傾向をもつとはいえない。つまり「なんらかの職能に従事する諸職能者のあいだには，実際的に，相対的優越性が存在する」のである[61]。おそらく，このような反駁にたいしても，プルードンからすれば，そのような相対的優越性は質的差異をあらわすものでしかなく，それぞれの生産物あるいは作品の「絶対的価値」は同じであるということになるだろう。

ここにいたって匿名氏は，いっきにプルードンの賃金の平等の命題を全面的に否定する。「各職能における労働者相互の相対的不平等は必然的に各労働者の活動の生産物のあいだに価値の差異を確立するということ，この価値の差異は，諸個人の諸条件という観点からは，便益の差異ないし賃金の差異によって表現されないものではありえないということ」。そしてこれに続いて，諸職能のあいだの平等についてもいっきに否定する。「同様に，社会との関係では諸職能の重要性の不平等な等級は，諸職能のあいだに生産物の分配一般において不平等な権利を確立するものであるということ。私はこれらの帰結を反論できないものとみなす」と[62]。

こう自己の主張を前面にだしてから，匿名氏はふたたび『忠告』の前半，第7節におけるプルードンのフーリエ主義批判を検討する。ここでの匿名氏のねらいはプルードンによる『国富論』解釈の欺瞞性をしめすことにある。

プルードンは，同節で，アダム・スミスは匿名氏のように「労働はその素材を尺度として評価される」とはせず，「あらゆる(肉体的・知的)生産物は，それに要した費用と時間に相当する」ことを「数学的正確さで」論証した，と指摘していた[63]。こうした文脈から匿名氏はつぎの箇所を引用する。

「さらに，とプルードン氏はいう・・・，この自然的不平等は生産物の質によって現れるのであって，われわれがいま説明したところのことすべてによれば，この自然的不平等はすでに無に帰着する。ここでわれわれのフーリエ主義者は勝ち誇ってこう叫ぶ。『なんだと！ティツィアーノの絵と居酒屋の看板とはなんの違いもないというのか！剣闘士の彫像はちょうど車一台分の切石に値するというのか！』」[64]。

匿名氏はこれにつづけてさらに，プルードンの「得意の話題」を引用する。

「剣闘士の彫像と比較しなければならないのは車一台分の切石ではなく，彫像師の全修養期間中に石切工が生産しうる切石の量，つまりこの後者の職業(彫刻師)に要する費用なのである」[65]。

これについて匿名氏はこう論評する。プルードンによるスミスからの「この引用が，自然それ自体の諸価値の不平等，したがって才能の諸権利に適切に関係していないのは遺憾である」と。さらに「この研究の範囲が，私にたいしてさらに先へ進んでいく義務を課すとしても，止まるべきはここであろう」として，プルードンのスミス解釈を問題にする[66]。

匿名氏はこう説明する。プルードン氏は自分の価値論のためにスミスという強大な権威を引き合いにだす。だが，プルードン氏はスミスの

61) *Ibid.*
62) *Ibid.*
63) Proudhon, *Avertissement,* p.197.
64) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), pp.1030-1031. なお匿名氏が引用するのはプルードンの『忠告』のつぎの箇所である。Proudhon, *Avertissement,* p.196.
65) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1031. なお匿名氏が引用するのはプルードンの『忠告』のつぎの箇所である。Proudhon, *Avertissement,* p.197. 引用文中のティツィアーノ(Tiziano Vecellio:1490-1576)はイタリア・ヴェネツィア派の画家。
66) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1031.

「諸原理を表面的にしか理解せず，あるいは間違ったかたちで提示しているということをしめすのは容易であろうと思われる」。しかしこれまでの議論を繰り返さないために，「私はスミスの著作の一節を引用することにとどめておこう。この箇所はきわめて断定的でしかも的確なので，スミスの学説の全般的方向にかんする考えを提供し，われわれの論敵の解釈がどこまでおよんでいるかを貴殿の読者にあかすことができる」[67]。匿名氏は，「労働の自由にかんするスミスの若干の考察」として『国富論』第1編，第10章，第2節から，つぎの箇所を引用する。すなわち，「あらゆる財産のなかでもっとも神聖かつ侵害すべからざる財産は，自分の勤労(sa propre industrie)の財産である。なぜならこの財産は他のあらゆる財産の根本的な基礎であるから。貧しい人が親からゆずられた財産は自分の両手の力と技能のうちにある。そして，かれがこの力と技能とを，隣人を害することなしに，自分が適切と思う方法で用いるのを妨げることは，この最も神聖な財産の明らかな侵害である。すなわちそれは，・・・正当な自由にたいする明白な侵害である(第1巻，252頁)」[68]。

このスミスの一節から，匿名氏は，プルードンのスミスへの読み込みをつぎのように批判している。「個人の勤労いいかえれば労働は，スミスにとってはあらゆる所有の原理なのである。だからスミスにとっては所有(des Propriétés)が存在し，しかもいくつかの種類の所有が存在する。そしてそれらの所有はすべて正当で，神聖かつ不可侵の基礎に由来するのである。所有(la Propriété)の正当な原理を労働にみいだす学説は，まちがいなく，平等の夢想よりもいっそう組合理論に適合する。さらにこういおう，プルードン氏がそうしたように，読者が今読まれた部分を書いた人間はあらゆる所有の根本的な敵であるということを証明するためには，ある種の厚かましさが必要だ」と[69]。

こうして匿名氏は，スミスのいう「個人的労働の神聖な自由」を「さまざまな仕事の専制的な平等の積極的な反証とみなされえないか」とのべ，プルードンの「仕事の平等」という専制にスミスのいう「労働の自由」を対峙させているのである[70]。

そして匿名氏は話題を転じ，プルードンが意識していないにせよ，その所有批判の根底にじつはフーリエの学派によって発展させられた諸原理があると指摘する。たとえば，協同(アソシアシオン)，連帯，共同資本の非排他的専有，社会的必要にたいする個人的能力の調和した関係，などである。プルードンはこれらに目が眩み，「調和的不平等にかんする至高の法則」を十分に研究しないまま，諸能力の平等のために，労働と才能に比例して報酬をうけとる権利を犠牲にしたのであると[71]。

さて，これまで匿名氏は「諸能力の平等」というプルードンの主張に的をしぼって論駁したが，以上をもってこの論駁は終わっている。とはいえ，フーリエ主義の分配命題は「各人にそ

67) *Ibid.*

68) *Ibid.* 匿名氏によるアダム・スミスからの引用は，ギャルニエ訳のフランス語版であることが確認できる。Smith, A., *Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations.* Traduction nouvelle avec des notes et observations par Germain Garnier, Paris 1802, t.I, p.252. これの第2版についても引用箇所のフランス語訳文および頁数は同じであった。なお引用文中の傍点(イタリック)は匿名氏による。

69) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1031.

70) *Ibid.* なお，匿名氏がプルードンの「仕事の平等」の主張を専制とみなすことに関連して，デイヴィドスンは，コンシデランのプルードン理解に匿名氏と同様の認識がみられることを指摘している。デイヴィドスンは，コンシデランとプルードンの根本的対立点を両者の個人主義の度合にみる。デイヴィドスンによれば，プルードンは個人の完璧な自由を要求するにあたって，まずあらゆる政治制度の廃止と経済的平等を主張した。他方，コンシデランはなんらかの組織は不可欠であるとし，個人の自由を最大化できる社会組織を探求した。そして個人の自由と社会秩序の両立をめざしたコンシデランは，プルードンのやり方が専制につうじると考えていた，という。Davidson, Rondel Van, *Did we think victory great?*, University Press of America, 1988., p.99.

71) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), pp.1031-1032.

の資本，労働，才能におうじて」であって，匿名氏は，能力の不平等の観点から各人の労働と才能におうじた不平等な分配を擁護はしたが，その拠出資本におうじた比例的分配についてはまったくふれていなかった。しかしこの「反駁」の最後に，かれはこの資本の問題を論じている[72]。

匿名氏は『忠告』の前半「所有の理論」，第4節「所有を改革するとは所有を破壊することである」におけるフーリエ主義批判をとりあげる。プルードンは，この第4節で，匿名氏が『擁護』で所有の廃止ではなく改革を繰り返し訴えていたのをうけて，これを批判していた。プルードンによれば，市民が使用する富と，その使用の形式ないし権利とを混同してはならない。富の保有者が地主であれ奴隷であれ僧侶でれ，この保有者にとって富の本質はかわらない。けれどもその享受と搾取の形式は変わっている。この形式が所有である。それは小作でもあるし，共有でもある。つまり所有は本来，有機体のように，成長するとその性質を変えていくという[73]。そしてかれはこう指摘している。「所有とは，とかれはいう，実体ではなく形式であって，事物すなわちそのあらゆる実体が形式の中にある事物を改革するということは，その形式を別の形式に置き換えるということ，すなわちその形式を破壊することである」と[74]。

プルードンは，さらに，フーリエ主義は所有を改革しようとするがそれは所有の破壊につながるということ，フーリエのいうように分割細分化された労働が統一された耕作におきかえられれば，そこにはもはや所有は存在しないだろうと，いささか諧謔をまじえてのべていた[75]。

こうしたプルードンの論難にたいして，匿名氏は，所有とは「ある対象とそこに付加される利得の排他的な占有」であって，フーリエ主義のいう所有の改革はけっして所有一般を否定するものではなく，むしろこれを擁護するものであると反論する[76]。

匿名氏は，まず，フーリエ主義の所有の改革すなわち所有の動産化について説明する。所有権が行使される対象には，土地・建物などの不動産と，家具・商品・法定貨幣・債券(inscriptions des rentes)などの動産がある。フーリエは，これらの不動産と動産を，所有の現行形態のひとつである債券所有に転換することを提起した。こうした所有形態の転換は，貧民の生活を保証し，所有者にたいしては現在よりも多い収入とその財産の何倍もの安全を保証するだろう[77]。要するに，フーリエ主義の所有の改革は，土地をもふくめた資本一般の動産化をふまえてその所有権を保証するのであって，けっしてその所有権を否定するものではないということである。

匿名氏はさらにふみこんで，所有形態をこのように改革すれば，所有一般が結局は社会全体の利益を増大させていくという。かれはこう説明する。ある社会で各個人が，その力量におうじて労働する権利と，その労働に比例した賃金を受け取る権利を認められるとしよう。この第一の権利から必然的に賃金の全額を消費する権利あるいはその一部を貯蓄する権利が生じる。他方，貨幣が存在するかぎり，有能な人や倹約家は「節約」によって資本を手にいれるだろう。かれらは自由にこの資本を使用したり蓄積したりできる。こうした蓄積行為は，社会が絶対的平等から，土地均分法から，あるいは国家所有から出発しようとも，短期間のうちに社会の構成員を二つの部類に，すなわち資本をもつ者とそれをもたない者に分割する。他方，諸個人の退蔵した資本は社会的労働からひきあげられた

72) L'anonyme,"Réponse à M.Proudhon," *La Phalange,* N° 66, 3 juin 1842(*La Phalange*, 3e série, t. V, pp.1084-1088).
73) Proudhon, *Avertissement,* pp.187-188.
74) *Ibid.,* p.186.
75) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1084. なお匿名氏はこれをプルードンのつぎの箇所から引用している。Proudhon, *ibid.,* p.187.
76) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1084.
77) *Ibid.*

生産要因である。したがって，これらの資本が社会的労働を豊かなものにするのに役立てば，人びとは巨大な利益をえられるであろう。では，資本家に自分の資本を産業や商業へ投下させる誘因は何か。それは私的な利益の見込み以外にない。この私的な利益を保証するものこそ，「資本の諸権利の承認」つまり自分の拠出した資本におうじて収入をえる権利の承認なのである。こうして匿名氏は「労働の権利と才能の権利とがしっかりと保証された社会においては，資本の権利を承認することは労働者の利益そのものだ」というのである[78]。

匿名氏は，つぎに，『忠告』前半，第8節「アダム・スミスの定式の社会的・経済的適用」を参照する。プルードンはそこで自著の『所有』から引用しつつ，スミスの定式にもとづく等労働交換の前提から所有のありうべからざることをまず主張し，さらに，労働者が生きていくためには自己の賃金で自己の生産した生産物を買い戻すことができなければなならないが，現実には所有の介在によってそれが不可能になっているとのべていた[79]。そうしてフーリエ主義をつぎのように批判する。「フーリエリストは，一方で，所有の擁護者としてみずからを表明し，他方では，労働者が自分の生産物全体を享受することを望んでいる。それはこの労働者に次のようにいうことにならないか。すなわち，働け，お前は一日に3フラン稼ぐが，一日55スーで生活している。差し引きの残りを所有者に提供しろ。そうすればお前は3フラン使ったことになるだろう」と[80]。プルードンは『所有』においてこのように批判している。しかし，匿名氏は，『擁護』でプルードンへの反批判をこころみながらも，このフーリエ主義批判については論及していない。プルードンは，匿名氏のこうした態度を，『忠告』のこの箇所で非難している。

匿名氏はこれをうけて，フーリエ派は「労働者が自己の生産物の全体を賃金として受け取らねばならないとはけっして主張しなかった」と反駁する。匿名氏はその理由をこう説明する。すなわち，もし労働者が自己の生産物のすべてをうけとるとすれば，生産物は労働だけの結果であって，資本，労働，才能の三つの生産要素の結合の結果ではないことになる。また，労働者が毎日享受している安全保障や地位の保全，とくに職の多さといった恩恵をかれが社会に負うてはいないことにもなる。さらに老人や病人や子供などの労働できない人びとと労働者とのあいだにいかなる連帯の絆もなくなることになる。つまり，もし労働者が自己の生産物をすべて受け取るとすれば，相互的譲渡(des concessions réciproques)にもとづかない社会が存在しうることになる。これは全人類の否定につうじるだろう。だから，いかなる社会においても労働者が自己の生産物の全部を受け取るのは不可能であり，労働者の生産物の譲渡そのものから労働者の利益を生じさせるような結合がもっとも完璧な結合であると私は考える。というのは，資本と労働と才能の結合が個個人の努力に付け加える力のおかげで，労働者の賃金は，他の諸権利によって控除がなされても，なお労働者すべての欲求を満足させるのに十分であり，しかも他のいかなる組織よりもまさったものになるのは明らかだからである[81]。

この説明で注目すべきは，匿名氏がファランジュ共同体における生産活動を労働者と資本家と才人の「相互的譲渡」と考えている点である。生産要素とされる資本と才能への分配分が，いわゆる公的サーヴィスの費用の負担分と同様に，労働の生産物からの控除項目にかぞえられる。

78) *Ibid.*, pp. 1084-1085.

79) Proudhon, *Avertissement,* p.201. なおプルードンがここで『所有』から引用するのはつぎの箇所である。Proudhon, *Propriété,* p.270, 同訳207頁。

80) Proudhon, *Avertissement,* pp.201. なおプルードンがここで『所有』から引用するのはつぎの箇所である。Proudhon, *Propriété,* p.276, 同訳214頁。なおプルードンによるこれと同じようなフーリエ主義批判が『ブランキ氏への手紙』にもみられる。Proudhon, *Lettre*, pp.111-116.

81) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1085.

しかもこれらの控除は，労働者の生産物の，労働者自身による譲渡とみされる。つまり，労働者が生産するにあたって，その労働者に資本家は資本を譲渡し，才人はその才能を譲渡する。一方，これらの資本と才能の譲渡を受けた労働者は，その見返りとして，資本家と才人に自己の生産物の一部を譲渡するということである。こうした「相互的譲渡」にもとづく労働と資本と才能の結合は生産力を増大させ，その結果，労働者が自己の生産物の一部を譲渡してもなお十分な生産物が手元に残るというのである。

この「相互的譲渡」の考えは，おそらく，『所有』におけるプルードンのフーリエ主義批判を念頭において匿名氏が展開したものであろう。プルードンは，フーリエ主義の分配命題を批判するとき，まず，フーリエ派の立論[82]からすれば，資本が収入の源泉にはなりえないとした。フーリエ派は先占権を否定し所有の原理として労働しか認めない。だが資本はその所有者に先占権によってしか利益をもたらさない。したがってフーリエ派の前提からすれば資本は交換されうるが，収入の源泉にはなりえないのである[83]。この批判にたいして，匿名氏は労働者の生産物の労働者による譲渡というかたちで資本の利子すなわち不労所得の説明をこころみたのであろう。

さて，資本の問題に関連して，匿名氏は，最後に，フーリエ主義の「財産の段階的不平等」の主張にたいするプルードンの批判を検討する。匿名氏はまず，以前にかいた『フーリエ主義の擁護』においてつぎのようにのべたという。すなわち，「フーリエ派共同体における労働の組織は貧窮を永久に消滅させると同時に，財産の諸段階(des degrés différents de fortune)を存続させることになるということ。さらに他方で，そこでは幸福は活動そのものに依存するがゆえに無為者は存在しえないであろうし，そこでは労働が資本からもっとも独立しており，もっとも生産的になるがゆえに，隷属的労働者は存在しえないであろうということ。最後に，特権がことごとく自然に社会から追放されることになり，社会の成員はそれぞれ自然権の完全な平等と保護と資力を享受するであろう」と[84]。

これについて，プルードンは，フーリエ派のいうように「資本の権利」を認めるかぎりファランステールには貧民と金持ち，無為者と労働者，特権保持者と賤民の差別がかわることなくみられるだろうと批判する。プルードンによれば「金持ちとはより多くもつ者(plus)を意味するのではないのか。そして貧民とはより少なくしかもたない者(moins)を意味するのではないのか。豊かさと貧困とは量的関係をしめすのにもちいられるふたつの相関語であって，それらを別べつにもちいても，一方または他方の絶対的状態を示すものではない。ファランステールには財産の異なった諸段階があるというのは，いいかえれば，より多くもつ者とより少なくしかもたない者がいるというのは，金持ちと貧民がいるということ認めることになる」[85]。

匿名氏はこの論難にたいして，かなり強い調子でこう切り返す。「金持ちはより多くもつ者で，貧民はより少なくしかもたない者を意味する。・・・とすると，10万リーヴルの地代をえる者は貧民ということになる。なぜならかれはその2倍もっている者より貧しいからである。したがって社会には貧民でない者などひとりもいないということになる。・・・この者は，自己より他の者のほうがより多くをもつようになると，何も失うことなく貧民になるだろう」と。匿名氏からすれば，貧困は，プルードンのいうよう

82) ここでのフーリエ派の立論とは，ファランジュ紙(第2シリーズ)に掲載されたコンシデランの「所有について」におけるそれをさしていると考えられる。コンシデランのこの論説については本稿の注27)参照。

83) Proudhon, *Propriété,* p.220. 同訳147頁。

84) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1085.

85) *Ibid.*なお匿名氏が引用するのは，プルードンの『忠告』のつぎの箇所である。Proudhon, *Avertissement,* p.205.

な相対的事実ではなく，「必需品の欠乏」という絶対的事実なのであった。そしてプルードンにたいし「貴殿は貧しいとはどういうことなのか・・・知らない」のだというのである[86]。

たしかに，匿名氏の指摘するように，プルードンは貧困を相対的なものとみなしている。しかし，だからといってプルードンが貧困を知らないといえるだろうか。われわれはプルードンの貧困観に，人間の欲望についての鋭い洞察にささえられた，平等を希求するかれの情念をみることができる。プルードンの主張をきこう。「人びとが貧しいのは，・・・社会全体に不足しているものの欠乏によるのではなく，あまねく知れわたり値打の認められた富，知能の発達や感受性の刺激あるいは他のあらゆる原因が必要ならしめた富，こうした富の欲望によってである。この欲望は，とりわけ財産の比較から生じる。・・・悲惨はどこから生じるのか。より多いかより少ないかから，地位の差別から，不平等からである。社会は，全体としてみれば，道徳にかんして，知識にかんして，また豊かさにかんしてまでも前進することができる。だが，この社会が中間と両極を内包しているかぎり，貧民と金持ちのあいだの隔たり，農奴と領主のあいだの隔たりは，依然として変わらない。つまり全体の幸福はそこにはないのである」[87]。プルードンによれば，貧困は，目にするが享受できない富にたいする欲望から生じ，この欲望は財産の比較から生じる。つまり貧困は地位の差別と不平等から生じるのである。たしかにファランステールでは「金持ちと貧民とは，われわれの時代の金持ちと貧民と比べれば，相対的により豊かでより貧しくないということはできる。だが問題は，ファランステールでの貧民と金持ちの条件の対比が，現在の状況以上に耐えうるものであるか否かを知ることである。ところで私は，ファランステールにより多くもつ者とより少くしかもたない者とが存在するかぎり，それが耐えうるものではないといおう」[88]。

プルードンの，フーリエ主義にたいするこの根本的な批判を看過し，貧困を「必需品の欠乏」という絶対的事実としかみない匿名氏は，ここでフーリエ派の目指す世界像をふたたび提示するのみである。ファラジュでは欠乏がなくなり，労働者はあらゆる隷従から解放されてその威厳と独立を回復する。しかも労働は快適で名誉と利益をもたらし，貧民は金持ちと同様に利益や昇進が保証されるのであると。そうして，この未来像を認めないプルードンを論難したのであった[89]。

IV. むすびにかえて

さて，これまで1842年の5月から6月にかけてファランジュ紙に掲載された匿名氏による「プルードン氏への反駁」をその叙述にそってみてきたが，ここでいま一度，その内容を概観しておこう。

プルードンは，『所有とは何か』第3章，第6節で，価値論的説明にささえられた賃金の平等というかれの基本的主張をふまえてフーリエ主義の分配命題を批判していた。匿名氏はこの批判を再度反駁すべく，プルードンの想定する二つの前提に注目する。「労働者は力量にかんして平等であること」と「仕事は相互に平等でありうること」の二つであった。

匿名氏はまずこの後者の前提から検討した。かれによれば，仕事の平等をいうためには諸職能を比較しなければならない。そのためには尺

86) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), p.1085.

87) Proudhon, *Avertissement,* pp.205-206. この引用文中にみられる「中間と両極」は，フーリエ独自の用語であって，ここでは具体的にいうと「中間」が中間階級を，「両極」とは富裕階級と貧困階級をさす。なお，この「中間と両極」は「中心と上昇翼・下降翼」ともいわれ，フーリエの「系列」すなわち存在一般の区分原理をさす。詳しくは前掲論文，拙稿「シャルル・フーリエと階級調和の方策」参照のこと。

88) Proudhon, *Avertissement,* p.205.

89) L'anonyme, "Réponse," *La Phalange* (3e série, t. V), pp.1085-1086.

度が必要になる。その尺度としてプルードンは職能の要する労働時間をあげる。しかしこれは労働の強度や難易度を測定しえない。だから労働時間は職能を比較する尺度にはなりえず，仕事の比較はできない。したがって仕事の平等はいえないと反駁した。また，それぞれの仕事の生産物の価値の観点からみても，その平等はいえないとした。つまり生産物の価値を決定するのは，その生産に要する労働の量ではなく，「意見の気まぐれ」である。したがってかりに等しい労働量を要する生産物が交換されると論じても，実際の取引では，そのとおりに等価で交換されるわけではない。したがって等しい労働の量を要する仕事が平等であるとはいえないとする。なお，プルードンの経済学的すなわち価値論的説明にかんして匿名氏はこのように反駁したが，匿名氏による価値論への言及は，ほぼこれに尽きていた。

匿名氏はさらに，仕事の平等を反駁するために，「私的な労働」を問題にした。かりに仕事が平等であるとしても，労働者には能力差があって，有能な労働者は自己の仕事を終えてから「私的な労働」に従事する自由をもつ。この自由を拘束するのは専制でしかない。そして「私的な労働」を認めれば，仕事の平等は成立しなくなるはずであると。

つぎに匿名氏は「労働者は力量にかんして平等であること」というプルードンのいまひとつの想定を検討する。プルードンが『所有』の第3章第7節でこの平等をいう場合，かれはあくまでも異なる職能に従事する労働者の能力にかんしていっているのであって，同一職能に従事する労働者の能力にかんしていっているのではないとする。匿名氏によれば，プルードンは，フーリエの主張する労働の快楽化をふまえながら，各人の能力の多様性にもとづいて社会的分業が極度に進展し，諸能力相互の関係が特技と特技の関係でしかなくなる社会，いわば「一人に一職能」が成立するような社会を想定しているとみなす。そのかぎりでプルードンは能力の平等をいう。したがってそこで比較されるのは異なる職能であって，同一職能に従事する労働者の能力ではなかった。匿名氏はこのようにプルードンの主張を了解したのであった。

こうしたプルードン理解をふまえて，匿名氏は，プルードンの主張がフーリエの思想の「馬鹿げた誇張」でしかなく，その非現実性をしめしているというかたちでこれを反駁する。匿名氏によれば，フーリエのいう「才能の不平等」とは同一職能に従事する労働者の能力の不平等をさすが，プルードンの見解を敷延すればこの能力も平等である。とすると，同一職能に従事する人びとにたいしてすべて同じ成果を期待できることになる。だが，現実には，それらの成果のあいだには相対的優越性がかならずみられるだろう。匿名氏による能力の平等にかんする反駁は，結局こうした主張に終始しているのである。

また匿名氏は，プルードンのアダム・スミス解釈を問題にする。プルードンはスミスを「あらゆる所有の根本的な敵」とみなす。だが，スミスは労働の自由を神聖不可侵なものとし，自由な労働を所有の原理としている。そしてこの労働にもとづく所有を正当なものとみなしている。したがってこの所有の否定は，仕事の平等の観点からであれ，労働の自由の否定であり，ある種の専制につうじる。こようにプルードンのスミス解釈はスミス自身の基本的主張になじまない。匿名氏はプルードンのスミス解釈にこう反駁しているのである。

匿名氏はプルードンの想定する「諸能力の平等」への反駁をしめくくるにあたって，プルードンにおけるフーリエ主義の影響を指摘する。プルードンは，能力におうじた分配の調和的不平等をのぞいて，協同，連帯，共同資本の非排他的専有，社会的必要にたいする個人的能力の調和した関係といった諸原理をフーリエ派と共有している。しかしプルードンはその調和的不平等にかえて諸能力の平等と賃金の平等という見方をもちこむ。これはフーリエ派の主張の無

理解をしめすばかりでなく，非現実的かつ不公正なものであった。以上のように匿名氏はプルードンのいう「諸能力の平等」を反駁している。

最後に，匿名氏は，プルードンによる資本の所有を否定する立場からのフーリエ主義批判にたいして，反論を三つ提示している。

第一に，匿名氏は，フーリエ派の主張する所有の改革は所有の破壊につうじるというプルードンの批判をとりあげ，資本の所有すなわち拠出資本におうじた分配を擁護する。匿名氏はまずフーリエ派の主張する所有の改革が資本一般の動産化すなわち債権化であることを説明し，これは所有権を否定するのではなく，逆にそれを保証すると反駁する。他方，労働に比例した賃金を受け取る権利が認められれば，有能な人や倹約家は節約によって資本を蓄積する。この資本が産業に投資されれば社会全体の利益になるが，この投資誘因こそ「私的な利益の見込み」すなわち拠出資本に比例して利益をえる権利の承認にほかならない。したがって資本の権利の承認は労働者の利益にもなる。匿名氏はこのように資本の所有を積極的に擁護してプルードンに反駁する。

第二に，プルードンは，フーリエ派は資本の利子すなわち不労所得を擁護する一方で，労働者がその生産物をすべて受け取ると主張するとして，その主張の矛盾を批判していた。これについて，匿名氏によれば，生産物は資本と労働と才能の結合の成果であって，けっして労働だけの成果ではない。生産活動は「相互的譲渡」の行為である。つまり労働者の生産活動に資本家がその資本を，才人がその才能を譲渡し，その見返りに労働者は自己の生産物の一部をかれらに譲渡する。したがってフーリエ派は，労働者が自己の生産物をすべて賃金として受け取るとは主張しなかったと反駁した。

第三に，匿名氏は，フーリエ派の主張する「財産の段階的不平等」にたいするプルードンの批判を検討する。プルードンによれば，貧困は富の欲望から生じ，その欲望はとくに財産の格差によって喚起される。つまり貧困は地位の不平等ないし財産の不平等から生じる。とすると，財産の段階的不平等があるかぎり，いいかえればより多くもつ者とより少なくしかもたない者とが存在するかぎり，貧困は存続する。したがって，財産の段階的不平等を内包するファランステールでは，プルードンによれば，貧困が存続するわけである。これにたいして匿名氏は，貧困とはプルードンのいうような相対的事実でなく「必需品の欠乏」という絶対的事実とみなす。ファランステールではこの「必需品の欠乏」は解消されるのであって，そこには貧困は存在しない。以上が，匿名氏による「プルードン氏への反駁」の主な内容であった。

さて，本稿のむすびにかえて，匿名氏のこの反駁の特徴を検討しておこう。

まず，ここにはふみこんだ経済学的分析がみられないことが指摘できる。かれの反駁は，たしかにフーリエ主義者としての一貫性はある。プルードンが「諸能力の平等」を想定して賃金の平等を主張するのにたいして，匿名氏は「諸能力の不平等」を想定して「労働の自由」と労働に比例した分配を一貫して主張した。そしてこの立場からすればプルードンの主張は個人の労働を抑圧する専制の擁護でしかないと反駁していた。しかし匿名氏の議論はこのような一貫性をもつとはいえ，プルードンへの反駁としてみればそれはきわめて不十分といわざるをえない。匿名氏が反駁の対象とするプルードンの主張は，そのほとんどが経済学的分析すなわち価値論的説明にささえられていた。にもかかわらず，匿名氏はそうした分析を避けるかたちでしか反駁していないからである。

さらに，匿名氏による反駁は，はからずも，一方ではプルードンとフーリエのあいだの理想社会像と貧困観ないし欲望認識の親近性を，他方では匿名氏のそれらにかんする無理解を浮き彫りにしている。すでにみたように匿名氏は，プルードンの平等の立場を反駁するにあたって，その「諸能力の平等」の想定に焦点をしぼった。

匿名氏のとる戦術は，同一職能に従事する労働者の「諸能力の平等」がいかに非現実的な想定であるかをしめすことにあった。そのさい匿名氏は，この想定が成立するはずのプルードンの非現実的な理想社会像もしめした。すなわち諸能力が階層化されずに同列に組織される社会，諸能力相互の関係が特技と特技の関係でしかなくなる社会という理想像である。そしてこれが，無用な人間が存在せず，絶対的にすぐれた人間もまた存在しないというフーリエ流の理想社会の「馬鹿げた誇張」にすぎないと論難した。だがこの論難は，逆にみれば，プルードンとフーリエとの理想社会像の親近性をしめすものにほかならない。事実，ここからフーリエとプルードンの両者の理想社会像の根底に，人間としての対等性の希求をみるのは容易であろう[90]。

また，匿名氏はフーリエ派の「財産の段階的不平等」の主張を擁護する文脈で，プルードンが貧困を相対的事実とみなしていることを論難した。だが匿名氏のそこでの反駁は表面的なものといわざるをえない。プルードンによれば，貧困は，富の格差によって喚起される人間の欲望に起因する。だから貧困は富の格差をなくすことによってしか解決されない。これにたいして匿名氏は，プルードンのこうした欲望認識にふれることなく，貧困をたんに「必需品の欠乏」ととらえ，この欠乏の解消を強調するのみであった。他方，フーリエは「大衆つまり貧困階級は，増大した富の分け前にあずかるどころか，富の増大によって窮乏の度を高めるのみである。というのは，貧困階級は膨大な種類の富を目にしながら，かれらはそれを享受できないからである」としたうえで，周知のように「文明においては貧困は豊かさそのものから生じる」とのべていた[91]。これをみると，むしろフーリエとプルードンが，匿名氏が理解しない，きわめて類似した欲望認識ないし貧困観をもっていたことがわかる。

とはいえ，フーリエとプルードンの類似はここまでであった。こうした欲望認識と貧困観を起点に，二人は逆の方向をたどる。フーリエは人間の欲望をさらに喚起すべく，富の段階づけを構想し，さらに欲望相互の均衡をはかる技術を探求する[92]。これにたいしてプルードンは欲望の沈静化をめざすべく，富の格差解消へとむかう。そうしてフーリエは「財産の段階的不平等」を，プルードンは「財産の平等」を主張していたのであった。他方，いまみたように，二人の理想社会には共通性があった。とすれば，フーリエとプルードンのここでの対立点は，理想社会の実現手段として欲望を喚起するか，あるいは欲望を沈静化するかという点に，さらにいえば，ものの見方として，事物の異なる様相に注目するか，あるいは事物に共通する様相を重視するかという点にもとめられるだろう。いうまでもなく，匿名氏がプルードンに反駁するさい，このようなレベルでフーリエとプルードンとの対立をとらえてはいなかった。その意味で，匿名氏の議論は，プルードンに深く内在するものでなく，またフーリエをも十分に理解していない，きわめて表面的なものにとどまっていたのである。

90) 佐藤茂行は，プルードンの社会主義が「人間の自由とこれのうえに立った人間としての平等を希求する情念」の所産であると指摘し，この情念にかれの社会主義の根源的生命力をみいだしている。佐藤茂行，前掲書，26頁～27頁。

91) Fourier, Ch., *Le nouveau monde industrielle et sociétaire,* 2e édition, Paris 1845 (*Œuvres complètes de Ch. Fourier,* t. VI), p.35, 田中正人訳『産業的協同社会的新世界』，『オーウェン，サン・シモン，フーリエ』，中公世界の名著，第42巻，1975年，所収，480～481頁。なお訳はかならずしもこれによっていない。

92) 欲望相互の均衡をはかる技術として，たとえば「男女の共有」幻想の利用があげられよう。前掲論文，拙稿「シャルル・フーリエの「愛の新世界」と資産配分」を参照。